クリストファー・プランタンの会計帳簿（1563～1567年）

片　岡　泰　彦

第1節　序

16世紀中葉にアントウェルペンで，印刷業者兼出版業者として活躍したクリストファー・プランタン[1]（Christopher Plantin）の名は，歴史にその名を残している。

無の状態から出発したプランタンは，1人で印刷業を起こし，後に共同出資して印刷業兼出版業を成功させたのである。

最盛期には，16台以上の印刷機を有し[2]，100人の従業員を雇い，34年間の生涯に，1,500種類の文献を印刷した。これらの数字は，当時としては驚くべきものであった。彼は「王の印刷屋」とか「出版界のプリンス」[3]とも呼ばれた。

現在，ベルギーのアントウェルペンには，プランタンが印刷業者として活躍した建物が，プランタン・モレトウス博物館（Museum Plantin Moretus）として残されている[4]。そこには，プランタンが活躍した印刷工場，活字部屋，鋳物工場，校正室そしてプランタンの部屋等多くの記念物が展示されている。

そして，この博物館には，1563年12月から1567年7月にわたるプランタンの印刷業を記録した仕訳帳と元帳の2冊の会計帳簿が保管されている。この2冊の会計帳簿は，会計史上2つの観点から極めて重要な要素を有している。

第1は，原価計算の歴史上の観点からであり，第2は，16世紀オランダの複式簿記史上の観点からである。

リトルトンは，原価計算（cost accounting）は，根本的には19世紀の産物（product）であると主張した[5]。しかし，この言葉は必ずしも正確とは言えない。我々は，すでに中世ヨーロッパの会計帳簿の中に原価計算の多くの萌芽を知っている。

例えば，フィレンツェの14世紀初頭のデル・ベーネ（Del Bene）商会，同じくフィレンツェの14世紀後半のフランチェスコ・マルコ・ダティーニ，14－16世紀にかけてのメディチ家，16世紀のフッガー家そして16世紀のプランタン等は，会計帳簿の中で初歩的ではあるが，原価計算を遂行していたのである[6]。

特に，このプランタンの会計帳簿は，原価計算史上，極めて重要な足跡を残したと言われてい

る。

1543年ジャン・インピン・クリストフェルス（Jan Ympyn Christoffels）のオランダ語による複式簿記文献が，アントウェルペンで出版された[7]。このインピンの簿記書こそ，オランダ語による最初のパチョーリ簿記論を基礎とするイタリア式複式簿記文献である。

すなわち，インピンの簿記書を通して，パチョーリの簿記論がオランダへ広まったと言われている。

しかし，インピンの簿記書出版後20年たって記録され始めたプランタンの会計帳簿は，必ずしもこのインピンの簿記書に依存していたとは言えない。まずプランタンの会計帳簿は，インピンが解説した簿記法とかなりの相違点が見られる。さらに，もしインピンに依存しているとすれば，なぜオランダ語で記録しなかったのか。実際には，ヴェネツィア方式の簿記法をイタリア語で記録していたのである。

本稿は，クリストファー・プランタンの人物像に光を当てた後，16世紀中葉のアントウェルペンで記録された会計帳簿の中に示された原価計算組織の実態と同じく会計帳簿に示された複式簿記とヴェネツィア式簿記の関係に考察を加えることを目的とする。

注

1）会計帳簿では，イタリア語名でクリストファロ・プランティン（Christofaro Plantin）と記入されているが，一般にはクリストファー・プランタン（Christopher Plantin）と英語名で呼ばれているので，これに従った。

2）Dr. L. Voetは，16台以下ではない，22台の可能性もあると解説しているが，エドラー・デ・ルーヴァーは22台としている。Dr. L. Voet, The Plantin Moretus Museum, Antwerp, 1977, P. 11. Florence Edler de Roover, "Cost Accounting in the Sixteenth Century," Studies in Costing by David Solomons, London 1952, pp. 53-71.

3）Dr. L. Voet, op. cit., p. 12.

4）筆者は，1994年4月2日，アントウェルペンのプランタン・モレトウス博物館を訪問し，会計帳簿等を調査する機会を得た。なおモレトウスとは，次女マルテイヌの夫ヤン・モレトウスをさす。プランタンは遺言でアントウェルペンの店と家を彼に残した。

5）A. C. Littleton, Accounting Evolution to 1900, New York, 1966, p. 340.

6）Edward Peragallo, Origin and Evolution of Double Entry bookkeeping, New York, 1938, pp. 38-50. S. Paul. Garner, Evolution of Cost Accounting to 1925, 1954, pp. 1-26. Edler de Roover, op. cit., p. 54.

7）Jan Ympyn Christoffels, Nieuwe Instructie ende bewijs der looffelijcker consten des Rekenboecks, Antwerpen, 1543.

第2節　プランタンの生涯

クリストファー・プランタン（Christopher Plantin）は，フランスのツール（Tours）近くの聖アヴェルタン（Saint-Avertin）で，1520年ごろ生誕した。この偉大な印刷業者の生年月日は，明確ではない。なぜなら，彼は，1514年から1525年にかけて，いろいろな年月日を誕生日として，あ

げているからである[1)]。

プランタンの少年時代については，あまり知られていない。プランタンの父は，妻を疾病で失った後，小さなプランタンを連れて放浪生活をしたようである。そして，1540年以後，父の足跡は不明である。

はじめ若いプランタンは，ノルマンディの有名な製本屋兼本屋であるロベール・マセⅡ世（Robert Mace Ⅱ）の徒弟となった。

その場所で，彼は，ジャンヌ・リヴィエールと出会い，1545年か1546年に結婚している。２人は，パリで数年間過ごした後，1548年または1549年にアントウェルペン（Antwerpen）へ行ったのである[2)]。

当時，世界的に偉大なこの商業都市は，プランタンをとりこにした。アントウェルペンは，プランタンの第２の祖国となった。プランタンは，1550年３月31日にアントウェルペンの市民権を獲得し，さらに同年サン・リュック・ギルド（Saint Luke Guild）の一員となった。

1550年ごろのアントウェルペンは，国際経済全体の中心地であった。アントウェルペンの商業ルートはイタリア，リスボン，セヴィリアの中継地点にまで達し，ポルトガル人，北ドイツ人，イタリア人，フランス人，スペイン人等の商人達が，アントウェルペンと商業的交流を持ったのである[3)]。

その頃，彼は製本と革細工の仕事に従事し，成功していた。彼の芸術的な製本，本のケース，本の表紙の装飾，そして鏤めた革細工には，すぐに客が飛びついたのである。

1555年，スペインのフィリップⅡ世（Philip II）の秘書のガブリエル・デ・サヤス（Gabriel de Çayas）は，アントウェルペンでの滞在中に，彼の主人のため，立派なケースをプランタンに注文した。

プランタンは，このケースを完成させた後，彼の有名な顧客のために，自分の素晴らしい作品を自分自身で届けることを決心した。彼は薄暗がりの中を歩いていた。その時，数人の酔っぱらいに出会った。酔っぱらい達は，箱を小脇に抱えたこの男を，先日自分達を侮辱したギター弾きと勘違いした。彼等は，プランタンの肩を刀で突き通してしまった。

長い間，プランタンは生死の間を彷徨ったが，ついに彼の強い体力は死に打ち勝った。しかし，彼はそれ以後，強い力を必要とする肉体労働的な製本の仕事は不可能となった。そこで彼は製本の仕事を諦め，印刷の仕事へと変わったのである[4)]。

そして彼は，何冊かの本を印刷・出版した。彼の印刷業者としての仕事は成功し，軌道に乗り出したかに見えた。しかし，1562年から1563年にかけて，プランタンの仕事はある妨害を受けた。

当時のアントワープは，宗教上難しい問題を抱えていた。1517年にドイツに始まった宗教改革の嵐は，ヨーロッパ全土へと吹き始め，アントワープにも進出してきた。

1521年以降，カール五世は新教を禁じ，新教徒を処刑する布告を出した。しかしこの命令は守られず，新教徒は増加して行った。したがって，司法当局はたびたび厳しい弾圧を試みていた。

プランタンは，異教の本を出版したという疑いで，司法当局の訪問を受けた。プランタンの３

人の助手は逮捕され，懲役の宣告を受けたが,3人とも逃亡してしまった。プランタンに対する取調べも行われたが，何の証拠も出てこなかった。しかし，プランタンは身の危険を感じてパリへ避難した。そして，1563年になって，すっかり身の潔白が証明され，アントウェルペンに帰ることができたのである[5)]。

そしてプランタンは，またこの帰国の年から4人の出資者の協力を得て，新たな印刷業を開始したのである。4人の出資者とは，コルネリス・デ・ボムベルゴ（Cornelis de bombergo）と彼の甥のカルロ・デ・ボムベルゴ（Carlo de Bombergo）ヤコブ・デ・ショッティ（Jacob de Schotti）及び医者のゴロピウス・ベカーノ（Goropius Becano）である[6)]。プランタンを含めた5人の出資による会社は，4年と6ヶ月間続くこととなる。

この論文の対象となる仕訳帳と元帳の2冊の会計帳簿は，この期間（1563年12月24日～1567年7月13日）の活動を記録したものである。

この期間中，プランタンは260種類の本を出版した。平均すると，1年間に50種類以上となり，当時としては，驚異的な数字であった。量のみではなく質的にも向上した。

アントウェルペンの評論家テオドール・ポールマン（Theodore Poelman）のような学識者によるポケットサイズの古典作品の解説本が出版され，さらにヘブライ語のバイブルは，アントワープの商人によってモロッコまで運ばれたのである。また，プランタンは幾冊かの商業本も出版した。その中には，1567年出版のピエール・サヴォンヌ（Pierre Savonne）の簿記書も含まれていた[7)]。

1567年，パートナーシップは，宗教上の理由から解散した。解散後，コルネリス・デ・ボムベルゴとヤコブ・デ・ショッティは，カルヴァン主義のために，宗教裁判から逃亡しなければならなかった[8)]。

プランタンは，また1人になってしまった。しかし彼の印刷業は，しっかりした経済基盤の上に成り立っていた。彼の印刷業は，1568年からまた再開するのである。そして彼の仕事は，フィリップ2世の援助を得て順調に進められたのである。

プランタンは，1568年から1572年にかけて，彼の人生の中で最も華やかな時期を迎える。この時，プランタン自身が所有した印刷機は16台以上に達した。

この16台以上という数字は，当時フランス最大の印刷業者エスティエンヌ家（Estiennes）でさえ4台以上は持っていなかったことを知るとき，その偉大さが理解できるのである。

しかし，破局がアントワープを襲った。1576年11月4日，スペインの軍隊がアントウェルペンへとなだれ込んだのだ。プランタン家は，惨害と略奪から免れたものの，その生産量は減少していった。1577年には5台の印刷機のみが動き，その後再び10台を超えることはなかった。

印刷物の数は減ったが，質が落ちることはなかった。戦争中にもかかわらず，重要な作品がプランタンの印刷機から生まれた。その作品の中には，オルティウス（Orletius）の地図，ラ・ヘレ（La Hèle）のミサの楽譜，偉大な人文主義者ジュストゥス・リプシウス（Justus Lipsius）による著書等が含まれていた。

スペインの略奪後，アントウェルペンは，反逆者としての立場をとることが決定的となった。プランタンは，政治上極めて難しい立場に立たされてしまった。

プランタンは，反スペイン王的作品を印刷しながら，一方ではスペイン王の印刷業者となった。

また，彼はイギリスのオレンジ公ウイリアム（William of Orange）の訪問を受け，さらにマティアス大公（Archduke Mathias）及びアンジュ公（Duke of Anjon）等反逆勢力の援助を得た。そして反逆勢力の印刷業者となる一方，またアントウェルペン公認の印刷業者となったのである。

戦火は，なかなか鎮まらなかった。そしてプランタンは，すぐにいくつかの経済的その他の困難な問題に直面した。

その後，ライデン（Leyden）に住んでいたジュストゥス・リプシウス（Justus Lipsius）は，プランタンにライデンに移住し，大学の印刷業者になることを勧めた。

プランタンは，この忠告を受け入れ，1583年初めにライデンへ移住した。2年ほどライデンに居住し，印刷の仕事に従事したが宗教上の理由から，またライデンに居られなくなってきた。プランタンはカトリック信者であったので，カルヴァン派の人々との不和に直面したのだ。プランタンは，1585年8月にオランダを去りケルンへと移住した[9]。その後，彼はアントウェルペンがアレクサンダー・ファルネーズ（Alexander Farnèse）によって奪回されたことを聞いた。彼はただちにアントウェルペンに帰り，また印刷業を続けた。

1589年7月1日，プランタンは死去した。そして同市の大聖堂の聖歌隊席の回廊（gallery）に埋葬された。

プランタンの死に際して，追悼者達は，プランタンは「出版界のプリンス」であったと言っている。彼は34年間に1,500種類の文献を印刷した。この年間約50種類に近い数字は，当時としては珍しく，脅威的なものであった。彼は，印刷を産業として完成させた最初の人物であった。印刷に関しては，長い間彼に匹敵する人物は現れなかった。

ギッチャルディン（Guicciardini）は，ネザーランドに関する有名な記述の中で，次のように述べている。

「この偉大な印刷所は，店に隣接して建てられている。そしてすべての特別な建物は，『王の印刷屋』であるクリストファー・プランタンに所属している。彼の企業は，我々の多くの賛美と記憶に値するものであり，より多くの印刷機，沢山の種類の活字，多くの印刷物そして他の設備，さらには全キリスト教徒間で全般的に使用されたすべての言語を校正・修正することによって高給を得る多くの有名な助手達が働く施設は，ヨーロッパ中，どこにも例がなかった」[10]。

注

1）Dr. L. Voet, op. cit., p. 7.

2）Dr. L. Voet, op. cit., p. 8.

3）A.プレシ／O.フェルターク著，高橋清徳編訳『図説・交易のヨーロッパ史』東洋書林，208頁を参照。

4）Dr. L. Voet, op. cit., p. 8.

5）Dr. L. Voet, op. cit., p. 9.

6）4人の出資者名は，会計帳簿に記入されたイタリア語によった。Voetは，コルネイユ・ヴァン・ボンベルヘン（Cornelis van Bomberghen），シャルル・ヴァン・ボンベルヘン（Charles van Bomberghen），ヤコブ・ド・スコッティ（Jacob de Schotti）そしてゴロピウス・ベカニュス（Goropius Becanus）としている。ルーヴァは，Jacopo de' SchottiとCornelius van Bomberghen以外はVoetと同じである。Dr. L. Voet, op. cit., p. 9.

7）Pierre Savonne, Instruction et maniere de tenir livres de raison ou de comptes par parties doubles...., Antwerp, 1567.

8）1555年，神聖ローマ皇帝のカール5世は息子のフェリペ2世にネーデルラントの統治を譲った。スペイン生まれのフェリペ2世は，ネーデルラントへの理解がなく，カトリック主義を統治の理念とし，新教の普及を禁止し，新教徒を弾圧した。そしてネーデルラントのゴイセン（乞食）党の結成等新教徒の運動を鎮圧するため，ネーデルラントに兵を進め軍事力によって宗教裁判会議を開き，容疑者を処刑し，亡命者の財産を没収した。さらに都市の特権を奪い，商工業を抑圧した。このため，1568年にオランダ独立裁判（1568－1648年）が始まった。しかし，1576年にヘントの平和（ゲントの和約）により，ネーデルラントの平和が，一時的に実現した。小学館『日本大百科事典』4巻，昭和60年2月，388頁。長谷川，大久保，土肥著『ヨーロッパ近世の開花』世界の歴史　17，中央公論社，1997年，183－187頁。

9）Dr. L. Voet, op. cit., p. 12.

10）Dr. L. Voet, op. cit., p. 12.

第3節　会計帳簿

クリストファー・プランタンの会計帳簿は，仕訳帳（Journal）と元帳（Grand Livre）[1]からなる。

I　仕訳

プランタンの仕訳帳は，1563年12月24日に始まり，1567年7月13日で終わる。約3年と7ヶ月にわたる期間であり，43フォーリオ，86頁にわたって記録されている。

仕訳帳は，左頁と右頁の両側の2頁分が1フォーリオで，1フォーリオ右頁，すなわち2頁目から会計記録は始まる。そして，43頁右頁をもって終わる。合計86頁である。

仕訳帳は，最初に転記済先の2つの元帳勘定のフォーリオ数，借方用語（per），借方勘定，貸方用語（*A*），貸方勘定，取引内容を説明する文章，アラビア数字による取引金額，そして最後はローマ数字に直した取引合計金額が記入されている。

借方用語のperと貸方用語の*A*で，全体を統一表示する方法は，ヴェネツィアの商人アンドレア・バルバリゴ，そしてヴェネツィアで出版されたパチョーリ，マンヅォーニ，カサノヴァ及びモスケッティ等[2]の文献と同様である。

そしてプランタンは，借方と貸方を区分する方法として2本の斜線（　//　）を採用した。この2本の斜線を記入する方法は，マンヅォーニ，カサノヴァ，モスケッティ，ピエトラそしてフ

第1図

仕　訳　帳

ラオス・デオ　　1563年12月24日

$\frac{1}{2}$	（借方）クリストファー・プランタン（Chistofaro Plantin）　//　（貸方）現金（Cassa） £.318.2.11. 9月8日――――――――£.　24 10月7日――――――――62.10. 同日――――――――102.10. 18日――――――――17.10. 19日――――――――10.10. 28日――――――――10.10. 11月18日――――――――29.12.　8. 12月7日――――――――44.　8.　4. 18日――――――――2.10.　1. 21日――――――――10.　5 24日――――――――21. £.　335.　6.　1. 差引――――――――£.　17.　3.　2.	318	2	1
$\frac{2}{2}$	（借方）ニコラス・コルネリス（Nicolas Cornelis）　//　（貸方）預金（Bechano）	47	6	
$\frac{2}{3}$	（借方）現金　//　（貸方）預金（Bechano）	100		
$\frac{2}{3}$	（借方）現金　//　（貸方）カルロ・デ・ボムベルゴ（Carlo de Bombergo）	95	2	5
$\frac{2}{3}$	（借方）現金　//　（貸方）コルネリス・デ・ボムベルゴ（Cornelis de Bombergo）	170	6	
$\frac{4}{1}$	（借方）トロイの上質の四角な紙　//　（貸方）クリストファー・プランタン	23	17	8
$\frac{4}{1}$	（借方）barbartの大きな紙　//　（貸方）クリストファー・プランタン	65	16	8
$\frac{4}{1}$	（借方）コムーネ・デ・ローンの小さな紙　//　（貸方）クリストファー・プランタン	63	10	3
$\frac{5}{1}$	（借方）上質の紙　//　（貸方）クリストファー・プランタン	1		
$\frac{5}{1}$	（借方）piere perichart　//　（貸方）クリストファー・プランタン	100		
$\frac{1}{5}$	（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）piere perichart	9	19	9
$\frac{5}{1}$	（借方）印刷　//　（貸方）クリストファー・プランタン	83	9	10
$\frac{5}{1}$	（借方）Massartie de la stampa　//　（貸方）クリストファー・プランタン	30	11	3
$\frac{6}{1}$	（借方）出版用の本　//　（貸方）クリストファー・プランタン	10	10	4
	（2頁目）			
$\frac{6}{3}$	12月24日 （借方）製造経費（spese de marchantia）　//　（貸方）コルネリオ・デ・ボムベルゴ	1	8	
$\frac{1}{3}$	（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）コルネリオ・デ・ボムベルゴ	38	2	3
$\frac{1}{2}$	（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）現金	25	1	8
$\frac{1}{2}$	（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）現金	4	2	
$\frac{1}{2}$	（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）現金	30		
$\frac{2}{7}$	（借方）現金　//　（貸方）Jacob Schotti	100		
	2月19日			
$\frac{1}{5}$	（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）ピエーレ・ペリカント	94	19	7
$\frac{6}{1}$	（借方）speses　//　（貸方）クリストファー・プランタン		7	
$\frac{5}{1}$	（借方）印刷機　//　（貸方）クリストファー・プランタン	5	8	4
$\frac{6}{1}$	（借方）鋳造（fonderie）　//　（貸方）クリストファー・プランタン	17	3	4

ローリ[3]等と同様である。

仕訳帳の形式について言えば，プランタンは，イタリア方式，特にヴェネツィア方式を採用したことになる。

会計記録のための数字は，アラビア数字とローマ数字の両方が使われている。

まず最初の年号は，ラウス・デオ（Laus deo）と神への祈りを記入した後，MDLXIII（1563年）というようにローマ数字で記録されている。そして日付に関しては， 24 decembrio（12月24日）とアラビア数字で記入している。

そして金額については，上述したように，仕訳の文中ではアラビア数字が，そして右側の金額欄ではローマ数字が使われている。

86頁にわたり記帳された仕訳帳のすべての取引は，元帳へ転記済の印として，左端の空欄に，上下に借方と貸方の転記先のフォーリオ数が分数形式で記入されている。

例えば，第1取引の（借方）クリストファー・プランタン　//　（貸方）現金の場合，借方のクリストファー・プランタン勘定は，元帳の1フォーリオに，貸方の現金勘定は，2フォーリオの現金勘定へ転記される。

したがって，その場合は$\frac{1}{2}$と記入されている。

さらに，仕訳帳の借方項目と貸方項目を，それぞれ元帳へ転記した証拠として，仕訳帳の借方部分（左側）と貸方部分（右側）を，それぞれ1本の斜線，合計2本の斜線で抹消している。

この2つの抹消方法については，アンドレア・バルバリゴ（1430年1月2日～1440年8月30日）が実際に採用しており，パチョーリも第14章と第15章で解説している。

仕訳帳の各仕訳記入には，各取引の順番を明確にする番号はつけられていない。

仕訳帳の第1取引は，（借方）クリストファー・プランタン（貸方）現金で，プランタンが現金31£. 8d. 2s. 11d. を消費する形式である[4]。

第2取引も，ニコラス・コルネリスが，47£. 6s. を使う形式である。

その後の第3，第4そして第5の取引で，預金を引き出したり，カルロ・デ・ボムベルゴ，コルネリス・デ・ボムベルゴ等が現金を投資するという形式をとる。

この形式は，実務上も会計学上も，妙な内容である。現金が先に支出され，後から入ってくるという形式である。

しかし，実務上，前後の違いこそあれ，現金の収支上は採算が合い，不合理とはなっていない。

II　元帳

仕訳帳のすべての勘定は元帳へ転記されている。したがって，元帳への記録は，1563年2月24日に始まり，1567年7月13日で終わる。

1フォーリオから138フォーリオ左頁まで，ほぼ完全な形で保管されている。

元帳は，左右両頁を同フォーリオとする左右貸借対照の勘定形式で記録されている。

左頁・借方はdie dar（与えるべし），右頁・貸方はdie aver（持つべし）で統一・表示されてい

る。この方式は，ヴェネツィアの商人ソランツォ，アンドレア・バルバリゴ，ジャコモ・バドエル等の会計帳簿，さらにはパチョーリ，マンヅォーニ，カサノヴァ，モスケッティ等のヴェネツィアで出版された文献と同様である。まさにヴェネツィア式簿記法によったものである。

当時，1543年にオランダのアントウェルペンで出版されたジャン・インピン・クリストフェルス（Jan Ympyn Christoffels）の簿記書では，元帳の左頁・借方は is debiteur または is schuldich，そして右頁・貸方は is crediteur または moet hebben である。

プランタンの帳簿は，会計記録開始の約20年前に，同じアントウェルペンで出版され，その後のオランダに多大の影響を与えたインピンの簿記書をほとんど参照しなかったことになる。アントウェルペンで記録されたプランタンの会計帳簿は，イタリア式簿記法により，イタリア語で記入されたのである。元帳には，20頁にわたる勘定目録（インデックス）が，アルファベット順に作成されている。

例えば，損益（pro e danno）勘定の場合は，11フォーリオ，49フォーリオ，133フォーリオに記録されていることを，直ちに知ることができる。

注

1）仕訳帳の表紙にはGiornale de la stampa（印刷の仕訳帳），元帳の表紙にはLibro de la Stampa（印刷の帳簿）と記入されている。

2）パチョーリ，マンヅォーニ，カサノヴァ及びモスケッティの文献については，拙著『イタリア簿記史論』森山書店を参照されたい。

3）ピエトラ及びフローリの文献については，次の２つの拙稿を参照されたい。「ピエトラの簿記書」大東文化大学「経済論集」第62号，1995年１月，「フローリの簿記書」大東文化大学「経済論集」第72号，1998年６月。

4）貨幣単位は，1£.（ポンド）は20s.（シリング），1s. は12d.（プフェンニヒ）である。

第４節　勘定科目

プランタンは本の印刷業者兼出版業者であった。したがって，商品販売業者と異なり，仕入，売上という単純な方法ではなく，印刷機や活字を備え，印刷用の紙を購入し，さらに諸種の営業費を支払わねばならなかった。

そこで，本の印刷を引受けた場合，その本の原価がいくらかかったかという事後原価計算を，実際に遂行したのである。

したがって，元帳の１フォーリオから138フォーリオまでに記帳された勘定科目には，現金勘定，出資者勘定，人名勘定，損益勘定，残高勘定等の他に印刷業独特の勘定科目が見られる。

例えば印刷機勘定，鋳造勘定，紙勘定，諸種の書籍勘定，書籍在庫勘定，製造経費勘定他等である。

I　現金勘定

現金（Cassa）勘定は，2フォーリオと41フォーリオに記録されている。2フォーリオの現金勘定の貸借差額の金額が，41フォーリオの現金勘定へ繰越されている。

ただし，41フォーリオの現金勘定は，勘定の締切りが遂行されず，現金勘定の残高を45フォーリオの残高勘定へ振替えるという手続が行われていない。

現金勘定における相手勘定は，クリストファー・プランタンを初めとする出資者勘定で，企業の資本として,5人の出資者が現金を出資し，そこから諸種の費用が支払われたことが明らかとなる。

II　出資者勘定

出資者勘定は，1フォーリオ，12フォーリオそして15フォーリオに記録されたクリストファー・プランタン勘定，3フォーリオに記入されたゴロピウス・ベカヌス，カルロ・デ・ボムベルゴ，コルネリス・デ・ボムベルゴそして7フォーリオのヤコブ・デ・ショッティ[1]の5人の人名勘定からなる。

この勘定によって，プランタンが4人の出資者の協力を得て経営活動を遂行したことが明らかとなる。

15フォーリオのクリストファー・プランタン勘定及び他の4人の人名勘定の貸借差額の残高は，45フォーリオの残高勘定へ振替えられる。

III　当座勘定のクリストファー・プランタン勘定

プランタン自身によって遂行されたすべての収入及び支出は，プランタンの名前による第2の勘定である。「34フォーリオの当座勘定のクリストファー・プランタン」（Christofaro Plantin de Conto Corrente）勘定に集められている。

この勘定は，実際にプランタン個人が責任を持つ現金取引が発生した場合にのみ記録された。

彼の資本金勘定である「クリストファー・プランタン」勘定とは区別して記録されている。

IV　諸種の書籍勘定

プランタンは多くの書籍を出版したが，会計記録上では，書籍（Libri）として統括せず，個々の本の名前を勘定として記録し，各本ごとに原価を算出したのである。

ここでは，7フォーリオのヴェルギリウス[2]第16（Virgilio in 16°）勘定と9フォーリオのレスポンスィヴ（Responsive）勘定という2種類の本についてのみ解説する。

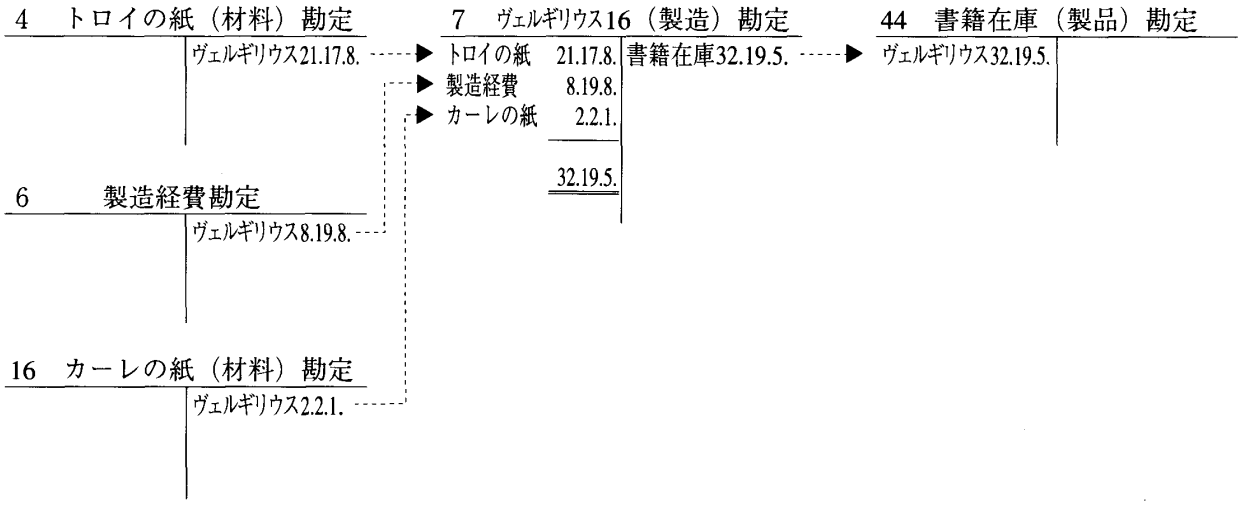
(1)　ヴェルギリウス第16勘定

このヴェルギリウス第16勘定では，左側・借方に，使用された紙の代金（Carta quadra fina de Troye＝トロイの上質の四角い用紙）21£. 17s.8d., 製造経費（Spesse di marchantia）8£. 19s. 8d. そ

第2図

元　帳

ヴェルギリウス（本）の勘定関係図



して誤った印刷の用紙代と思われる紙代金（Carte Carre' ＝カーレの用紙）2£. 2s. 1d. が記録されている。

右側の貸方には，紙代と製造経費の合計金額32£. 19s. 5d. が記入されている。

この勘定の内容から，ヴェルギリウスの2,500冊の本の原価が，32£. 19s. 5d. であることが明らかとなる。

そしてこの金額は，44フォーリオの書籍在庫（Libro in monte）勘定へ振替えられる。この書籍在庫勘定は，現代の製品勘定と同様の性格を持つ。また，ヴェルギリウス第16勘定は，現代の製造勘定と同様のものと考えることができる。

また，ヴェルギリウスの本を印刷するために消費された製造経費8£. 19d. 8s.は，6フォーリオの製造経費（Spese de marchantia）勘定から移記されたものである。

(2)　レスポンスィヴ勘定

9フォーリオの書籍，レスポンスィヴ勘定では，左頁・借方に（4フォーリオ）紙代（Carta petit）勘定12£. 8d. 14s.（6フォーリオ）製造経費（Spese de marchantia）勘定7£. 2d. 6s.，（4フォーリオ）紙代（Carta petit）1£. 4d. 8s. が記録されている。そして右頁・貸方には，書籍在庫（Libro in monte）勘定，20£. 15d. 6s. が記録されている。

これは，1,150冊のレスポンスィヴの書籍の製造原価として，紙代13£. 13d.（12£. 8d. 4s.＋1£. 4d. 8s.）と営業費7£. 2d. 6s. の合計額20£. 15d. 6s. がかかったことを示している。

V　紙勘定

そして，ヴェルギリウスやレスポンスィヴ等の本の印刷のために使われた4フォーリオに示されたトロイの上質の四角い用紙勘定は，左頁・借方に用紙の仕入金額，右側・貸方に印刷のため

第3図

6　　製造経費勘定　　6

	相手勘定	£.	s.	d.		相手勘定	£.	s.	d.
クリストファー・プランタン	1	37	1	1	ヴェルギリウス16	7	8	19	8
コルネイユ・ヴァン・ボムベルヘン	3	1	8		ホラーショ16	7	3	10	9
クリストファー・プランタン	1	36	11	4	ルカーヌス16	9	3	13	
クリストファー・プランタン	1	7	11	6	イギリスのVenerabili Sacerdoti 8	9	7	2	6
クリストファー・プランタン	1	54		3	Civilitá puerile 8	9	1	4	
クリストファー・プランタン	1	47	8		Magia naturale 16	10	2	15	
クリストファー・プランタン	12	54	3	10	Lorei ferenty	11	1	18	9
					Fambuch Carte poeticha in 8	11	2	7	
					― 省略 ―				
		238	4				238	4	

に使われた用紙の金額が記録されている。現代の原材料勘定にあたるものである。

全体としては，947リスメ（Risme）[3]の用紙187£. 9s. 8d. 分が購入され，9種類の書籍の印刷のために使われ，656リスメ，128£. 10s. 11d. の分が残ったのである。

そしてこの残高は，16フォーリオのカーレの用紙勘定へ振替えられている。

Ⅵ　製造経費勘定

この6フォーリオの製造経費勘定（Spese de marchantia）[4]の左頁・借方には，コルネリオ・デ・ボムベルゴやクリストファー・プランタンの人名勘定が相手勘定として記入されており，給料その他の経費を，これらの人物に支払ったことが示されている。

そして右頁の貸方には，相手勘定としてヴェルギリウスを初めとして，Horatio in 16°等他の勘定が記入されており，製造経費が諸種の書籍に配布されたことが示されている。

そして，最終的にこの6フォーリオの製造経費勘定は，勘定の記入がいっぱいになった時点で，勘定の貸借差額138£. 4s. を14フォーリオの同じ製造経費勘定へ振替えている。

Ⅶ　書籍在庫勘定

44フォーリオの製品勘定としての書籍在庫勘定の左頁・借方には，約60種類の各本の製造原価が記録されている。

そして，右頁・貸方には，それら74,950冊の書物の合計金額936£. 10s. が記録されている。この合計額は，66フォーリオの書籍在庫勘定へ繰越されている。

この合計金額936£. 10s. は，プランタンが印刷した書物のある期間（1563年－1565年）の全製造原価を示すものである。

さらに，この合計金額は，45フォーリオの残高（Bilanzo）勘定の借方に移記されている。

第4図

44　書籍在庫（製品）勘定　44

(1565年)　冊		相手勘定	£.	s.	d.	(1565年)	相手勘定	£.	s.	d.
ヴェルギリウス第16	2,500	7	32	19	5	残　高	45	936		10
ホラーショ第16	1,250	7	9	12	1					
ルカーノ第16	1,250	9	10		7					
レスポンスィヴ	1,150	9	20	15	6					
― 省略 ―										
	74,950		936		10			936		10

Ⅷ プレス機勘定

6フォーリオのプレス機（presse）勘定は，左頁・借方に相手勘定として，3回にわたりクリストファー・プランタン勘定が示されている。

これは，プランタンがプレスの代金を3回にわたり支払ったことを示すものである。

そして，右頁・貸方の合計金額48£. 6d. が，プレスの合計代金として，45フォーリオの残高勘定へ振替えられている。

Ⅸ　残高勘定

45フォーリオの残高（ビランツォ＝Bilanzo）勘定は，1565年4月26日付で記録されている。共同企業を設立し帳簿記録を開始したのが，1563年12月24日なので，1年と4ヶ月ぶりに勘定の締切りが行われ，すべての勘定の残高がこの残高勘定に集められたことになる。

左頁・借方には，資産勘定と費用及び損益勘定が示されている。

資産勘定には，プレス機（presse）勘定，印刷機械（Massartie de la stampa）勘定，鋳造（fondere）勘定，印刷中の本（Libro per uso di la stampa）勘定，すなわち仕掛費勘定，紙（Carta）勘定，すなわち材料勘定，タイプ（pres fondver）勘定，多数の書籍（Libri in Monte）勘定，すなわち製品勘定そして人名による債権者勘定等がある。

そして損益（pro e danno）勘定及び費用勘定として，製造経費（spese de marchantia）勘定等がある。右頁の貸方には，資本，負債そして収益等の勘定が示されている。

まず資本金勘定として，ゴロピウス・ベカヌス，カルロ・デ・ボムベルゴ，コルネリス・デ・ボムベルゴ，ヤコブ・デ・ショッティそしてクリストファー・プランタンの5人の出資者の名記が記入されている。

次いで，プランタンが支払うべき負債額として，クリストファー・プランタンの当座勘定（Christofaro Plantino de Conto Corrente）が記入されている。

そして，本の売上勘定として，ファイネックスの紙（Carta da fainex）勘定，4£. 9s. 7d. と本の売上（Carta et Libri veneduti）243£. 12s. 1d. が記入されている。

最後に，グリリス・シュミット（Grillis Schmidt），ヤコブ・ゲルラッハ（Jacob Gerlach），ハン

第5図

45　1565年　　残　高　勘　定　　1565年　45

勘定科目	相手勘定		£.	s.	d.	勘定科目	相手勘定		£.	s.	d.
紙	4	46	10	17	9	ゴロビウス・ベカーノ	3	46	300		
紙	5	47	30	6	8	カルロ・デ・ボムベルゴ	3	46	300		
プレス機	5	47	290	3	8	コルネリス・デ・ボムベルゴ	3	46	601	2	1
印刷機械	5	47	171	5	7	ヤコブ・デ・ショッティ	7	47	300		
印刷中の本（仕掛品）	6	47	19	14	4	資本金のクリストファー・プランタン	15	50	278	17	10
鋳造	6	47	122	18	5						
プレス機	6	48	48		6	当座勘定のクリストファー・プランタン	34	56	47	12	1
紙	8	48	8	3							
紙	8	48	17	17	8	ファイネックスの紙	36	57	4	9	7
（省　　略）						グリリス・シュミット	39	59	208		
損益	11	49	14			ヤコブ・ゲルラッハ	39	59	408		
製造経費	14	49	403	8		ハンス・オルト	40	59	253		
紙	15	50	17	3	6	本の売上	41	59	243	12	1
紙箱	16	50	15	18	10	ジョルジョ・ステッカー	41	60	408		
紙	16	50	1	12							
紙	16	50	1	2							
（省　　略）											
書籍在庫	44	62	936		10						
			3352	13	8				3352	13	8

ス・オルト（Hans Ort），ジョルジョ・ステッカー（Jiorgio Stecker）の4人の人名勘定が，負債勘定として記入されている。

この残高勘定は，単なる残高試算表であって，貸借対照表としての性質は有していない。この残高勘定は，元帳では1回しか作成されておらず，当時，まだ定期的決算の必要性はなかったようである。

収益から製品原価を差引くことによって，利益を算出するという計算方法はとられていない。借方に記録された損益勘定（14£.）は，借入金に対する支払利息の金額である。すなわち，貸方に示された4人の借入金に対する支払い利息である。

注

1）上述したように，この人名の呼び方は会計帳簿によっている。

2）Virgilio＝ヴィルギィリオ。通常は，ヴェルギリウスと呼ばれる。正式名はpublico Virgilio Maroneであり，紀元前70－19年に生きたローマの詩人である。

3）Risme（リスメ）は480枚分の用紙の単位，一連，20帖分である。

4）Spese de marchantiaは直訳では営業費であるが，その内容から製造経費と訳した。

第5節　アンドレア・バルバリゴとの比較

プランタンの会計帳簿は，イタリア式簿記法に従い，イタリア語で記録されたことは前述の通りである。

プランタンの会計帳簿が，なぜイタリア簿記法によって，イタリア語で記入されたのか，その

理由は明らかではない。

フローレンス・エドラー・デ・ルーヴァーは，このことについて次のように推論している[1)]。

第１の推論として，イタリア式簿記が，アントウェルペンの商人達によって採用されたのは，有名な事実である。その商人の１人が，プランタンの仲間の１人であったコルネリス・デ・ボムベルゴではなかったかというのである。彼の仕事は，つづれ織りや他の北方の商品をイタリアへ輸出することだった。彼はイタリア商人と取引を通じて，イタリア式簿記を知り得たとするのである。

第２の推論は，やはりプランタンの仲間であったカルロ･デ･ボムベルゴの父であり，長年ヴェネツィアの印刷屋であったダニエル・デ・ボムベルゴ（Daniel van Bormbergo）の会計帳簿をモデルとして記録されたものであるというのである。どちらが，真実かは明確ではない。

しかし，とにかくプランタンの２冊の会計帳簿は，ルカ・パチョーリが「スムマ」の中で解説した複式簿記の技術によって記録されたのである[2)]。

次に，現在ヴェネツィア国立古文書館(Archivio di Stato di Venezia）に保管されているアンドレア・バルバリゴ（Andrea Barbarigo）の仕訳帳Ａ号と元帳Ａ号（ともに1430年１月２日－1440年８月30日）とプランタンの仕訳帳と元帳を比較し，その類似点と相違点を明確にすることにより，プランタンの会計帳簿とヴェネツィア式簿記の関連性について考察する[3)]。

Ⅰ　類似点

（１）プランタンもバルバリゴも，ともに仕訳帳と元帳の２冊の帳簿を主要簿とした。

（２）両者ともパチョーリがその必要性を解説した財産目録と日記帳を採用していない。

（３）プランタンもバルバリゴも，仕訳帳の貸借用語をper（＝借方）と*A*（＝貸方）で統一表示した。

このperと*A*の貸借用語は，パチョーリ，マンヅォーニ，カサノヴァ，モスケッティ等ヴェネツィア出版の簿記文献の中で示されている。

（４）元帳の貸借用語は，プランタンが，借方をdie dar，貸方をdie averで統一・表示したが，バルバリゴも借方をde（またはdino）dar，貸方をde（またはdeno）averで記入した。

この元帳の貸借用語についても，パチョーリ，マンヅォーニ，カサノヴァそしてモスケッティ等も同様である。

（５）両者とも，仕訳帳の借方項目と貸方項目を元帳へ転記した時に，転記済の証拠として，仕訳の左側に，元帳勘定の２つのフォーリオ数を上下に記入し，さらに仕訳帳に２本の斜線を引く方法は同様である。

（６）ともに元帳勘定を締切り，残高を新しい勘定へ振替える方法は同様である。

（７）両者とも，資本金勘定として，capitaleに類似した用語は使わず人名勘定を採用した。

（８）ともに年次決算を遂行していない。

（９）両者とも，元帳については，一頁を左右・貸借に区分するのではなく，左頁を借方に右頁を貸方と１つの勘定を２頁で記録している。

Ⅱ　相違点

（１）アンドレア・バルバリゴは，ヴェネツィアの商人である。したがって，主たる業務は商品販売業であり，記録された勘定も商品名，各地への旅商，諸種の人名が主たるものである。

これに対し，クリストファー・プランタンは，アントウェルペンの印刷業者である。したがって，商品名，各地への旅商等の勘定はなく，製品，製造，原材料，機械，等の製造業独特の勘定が見られる。

（２）資本金勘定としての人名勘定は，プランタンは，プランタンと他の４人（合計５人）の共同出資による経営だったので，資本主として５人の人名が記録された。

これに対し，バルバリゴの場合は，アンドレア・バルバリゴ１人による出資なので，アンドレア・バルバリゴ勘定そのものが資本金勘定としての性格を持つものであった。

（３）バルバリゴの場合は，損益勘定の貸借差額が資本金勘定へ振替えられ，資本金勘定の差額が決算残高（債権者・債務者）勘定へ振替えられるという会計手続が遂行されている。

これに対し，プランタンの場合は，損益勘定の貸借差額は,5人の出資者勘定，当座勘定，機械，製品，製造等他の多くの勘定とともに残高（Bilanzo）勘定へ振替えられている。

（４）仕訳帳の数字については，バルバリゴの場合，仕訳の説明部分の一部の金額以外，すべてローマ数字で記入されている。

これに対し，プランタンの場合は，仕訳の説明部分はすべてアラビア数字で記入し，右端の金額欄は，すべてローマ数字で記録している。

元帳についても，ほぼこれに近い傾向が見られる。

すなわち，16世紀（1560年代）のオランダでは，会計上アラビア数字の普及が多く見られたが，なおローマ数字の使用が残っていたことが解る。

（5）両者とも仕訳の左端に，元帳への転記済の証拠として，元帳勘定の2つのフォーリオ数を上下に記入したが，バルバリゴの場合は$\frac{1}{2}$と上下にフォーリオ数を記入したのに対し，プランタンの場合は，$\frac{1}{2}$と数字の間に線を引いて，分数形式で記録した。

注

1）Edler de Roover, op. cit., pp. 57-58.

2）Edler de Roover, op. cit., p. 58.

3）アンドレア・バルバリゴの会計帳簿については，拙著『イタリア簿記史論』森山書店，53－72頁を参照されたい。

第6節　結

プランタンの印刷業における原価計算方式は，かなり発達した方式で遂行されていた。

材料勘定として諸種の紙勘定，労務費及び経費勘定として製造経費勘定，製造勘定として諸種の書籍勘定（例えばヴェルギリウス第16＝Virgilio in 16°），製品勘定として書籍在庫勘定，仕掛品勘定として印刷中の本勘定等が記録された。

そして，これらの諸勘定は，現代の原価計算勘定連絡図のように，組織的に連絡をもって示された。紙代と製造経費から，一種類につき数千冊の本の印刷代が計算され，その各本の原価が書籍在庫勘定へ集められた。

したがって，書籍在庫勘定には，全書籍の印刷代金が示されることとなった。

ただし，個々の本の売上高と製造原価を差引きすることによって，売上利益を算出する方法はなされていない。45フォーリオの残高勘定には，各勘定の残高が集められただけで，全体の損益計算を遂行されていないのである。

プランタンの会計記録の目的は，プランタンを含めた5人の出資者の関係を明確にすること，そして印刷する本の原価を算出すること，さらにプランタンが所有する資産，負債，資本の各金額と各取引の損益計算にあったように思われる。

エドラー・デ・ルーヴァーは，プランタンの会計帳簿は，パチョーリによって規定された方法に従って，ヴェネツィア方式で記録されたと論述した[1)]。

この主張は，ある意味で正しい。ただし，それ程単純なものではない。

もちろん，プランタンの会計帳簿は，パチョーリ簿記論と多くの類似点を持っている。

例えば，仕訳帳，元帳における貸借用語，仕訳帳から元帳への転記済の証明，元帳の締切方法等は，パチョーリと同様または類似している。

しかし，日記帳，開業財産目録のないこと，資本金（Capitale）勘定を使わないこと等多くの相違点がある。

プランタンの簿記技術は，むしろアンドレア・バルバリゴのような会計帳簿の方法に類似しているように思われる。プランタンの会計帳簿は，パチョーリ簿記論に基づくヴェネツィア方式に

よって書かれたものではなく，ヴェネツィアの商人さらにはそれ以外のイタリア商人（例えばフィレンツェの商人）等によっても採用されていた複式簿記によって記録されたものと思われる[2)]。

従って，当時出版されたばかりのインピンのオランダ語による簿記書も，十分読まれた可能性もあるが，インピンに依存することなく，イタリア商人の実務の中で生成した複式簿記を基礎として作成された可能性が強い。

パチョーリ簿記論が，オランダ語に訳されて，オランダにイタリア式簿記が普及したとする見解があると同時に，イタリア人とオランダ人との交流を通じて，イタリア式簿記がオランダへ流出したとする見解も，当然あるべきである[3)]。

注

1）Edler de Roover, op. cit., p. 58.

2）小島男佐夫教授は，「プランタン印刷出版組合の工業会計は，…複式簿記法を製造工業の会計法にとり入れ，元帳諸勘定の組織的体系の上で製造活動を把握し，製品原価の算出を行ったのである。」と述べている。小島男佐夫著『会計史入門』森山書店，1987年，153頁。

3）ソロモンズは，「プランタンが，アントワープで遂行しつつあったことは，ヴェニス及びイタリアの他の場所で，広く実行されていたにちがいない。なぜならネザーランドの商家の若者達が，商業実務を学ぶためにしばしばイタリアへ派遣されたことを我々は知っているからである」と記述している。David Solomons, Studies in Costing, London, 1952, p. 4.

The Account Books of Christopher Plantin (1563~1567)

Summary

Yasuhiko Kataoka

Christopher Plantin's name has gone down in history for his activities as a printer and publisher in mid-16th century Antwerp. From low circumstances, Plantin singlehandedly established a printing business, courted investment and enjoyed great success in printing and publishing. At his peak, he had more than 16 printing presses and 100 employees, and printed 1,500 titles over a period of 34 years. At the time, these figures were so astonishing that he became known as the "The King's Printer" or the "Prince of Printers."

The building that housed Plantin's presses is preserved today as the Museum Plantin Moretus in present day Antwerp, Belgium. It houses many exhibits concerned with Plantin's business, such as printing plant, type room, foundry, correctors' room, etc. The museum keeps Plantin's journal and ledger (the grand livre) covering the period from December 1563 to July 1567. In the history of accounting, these two account books are extremely important pieces in two respects: first, for cost accounting history, and secondly, for double-entry bookkeeping in the 16th century Netherlands.

Littleton asserted that cost accounting is a product of the 19th century. This is not strictly true, however. We know that the germ of cost accounting was already found in many account books in Europe from the middle ages. For example, the beginnings of cost accounting can be seen in the account books of the Del Bene Company in early 14th century Florence, of Francisco Marco Datini in the later 14th century (again in Florence), of the Medici family from the 14th to 16th centuries, of the Fugger family (South Germany) and of Plantin himself in the 16th century, etc. It is said that Plantin's account books, in particular, left a very important mark in the history of cost accounting.

In 1548, Jan Ympyn Christoffels' Dutch-language work on double-entry bookkeeping was published in Antwerp. Ympyn's book was the first document to appear in the Dutch language regarding the Italian method of cost accounting based on Pacioli's bookkeeping theory. In this way, it can be said that Pacioli's bookkeeping theory was spread through the Netherlands by Ympyn's book.

While Plantin started keeping records in his account book twenty years after the appearance of Ympyn's

work, however, it cannot be said that he always depended on Ympyn's accounting. First, Plantin's account book shows a great variance from the method introduced by Ympyn. Moreover, if he did depend on Ympyn, then why didn't he keep his records in Dutch? In fact, he kept his records in Italian and according to the Venetian bookkeeping method.

After spotlighting the figure of Christopher Plantin, this paper aims to show the cost accounting and the connection between the Venetian bookkeeping method and double-entry bookkeeping methods exhibited in account books of mid-16th century Antwerp.

Plantin's cost accounting method for printers was performed in a very sophisticated manner. Items were recorded in real accounts: varieties of paper accounts as raw material accounts; "spese de marchantia" as labor costs and expense accounts; various book account (e.g., "Virgilio in 16°") as manufacturing accounts; books in stock ("libri in monte") account as finished product accounts; and books currently printing account as goods in process accounts, etc. These various accounts show systematic connections with each other, much like modern day cost accounting connecting plans.

Print costs for hundreds to thousands of copies of each book were calculated from paper costs to "spese de marchantia", and these costs were shown for every title in the books in stock account. However, deducting the manufacturing costs from the sales figures for each book did not produce a sales profit calculation method. Nor did the 45 folio Balance ("Bilanzo") account, by simply adding the balances of each account , produce an overall profit and loss calculation.

It is believed that Plantin's accounts aimed at clarifying the relations among the five investors including Plantin, calculating the print costs of each book, and moreover as some sort of profit and loss calculation for all the assets, liabilities and capital owned by Plantin, for each amount of money and each transaction. Edler de Poover said that both account books were kept according to the Venetian method of double-entry bookkeeping as described and exemplified in Luca Pacioli's Summa. While there is some truth to the claim, it is not as simple as that.

Of course, Plantin's account books show many similarities to Pacioli's bookkeeping theory. For example, debit side and credit side of the journal and the ledger, the posting of evidence from the journal into the ledger, and the ledger's closing method, etc., are all the same or similar to Pacioli. There are many differences too, however, such as the lack of a day book or opening inventory, the rejection of the use of a capital ("capitale") account, etc. It would seem rather that Plantin's bookkeeping method has more in common with Andrea Barbarigo's accounting method.

We can think that Plantin's accounts books were not written using the Venetian bookkeeping method based on Pacioli's bookkeeping theory, but the double-entry bookkeeping method used by businessmen in Venice and other Italian cities such as Florence. So while it is certainly possible that the accountant had read Ympyn's recently published Dutch-language work, there is also the very strong possibility that he based his records not on Ympyn, but on the double-entry bookkeeping method born out of practical necessity by Italian businessmen. While there is one opinion that says the Italian bookkeeping method was spread through the Netherlands after being translated into Dutch, a second opinion must be considered: that the spread of the Italian bookkeeping method through the Netherlands was due to the interchange of Italian and Dutch people.